



動かざる
もの

川崎ゆきお

「山がそこにある」

「はい」

「風が吹く。この季節、西風が多い。この場所ではな」

「はい」

「こういう動かしがたい話が私は好きだ」

「あ、はい」

「それとは別の話とは、人文の話だな。これは何とでも言える。時代により動いておる。語る人によっても違って来る。それらは信用ならん。やはり山がそこにある。風が西から吹いておる。これがいい」

「しかし、あまり大きな意味はありませんよ。ただそれだけのことでしょ」

「そうじゃ」

「石がそこにある。のと同じでしょ」

「石が何処にある」

「えっ」

「だから、その石は何処にある。石だけが背景なしにあるのかね」

「何処でもいいです」

「風も場所により吹き方が違う。季節によってもな。石も何処かにあるわけじゃ。何処じゃ？」

「テーブルの上にです」

「そんなところに何故乗せる。誰かが乗せないと、石はテーブルの上にはないぞ」

「ああ、適当に言いました。石は市街地の歩道にありました」

「どのぐらいの大きさを、数は」

「ポツンと一つだけ、歩道に。そして、握り拳ほどの大きさを」

「石の種類は」

「はあ」

「花崗岩か、玄武岩か」

「いやあ、石一般です。よくあるような」

「市街地の歩道に石など最初からないだろう。誰かが落としたりしたのか、近くの石を蹴飛ばして、歩道に乗ったか」

「ああ」

「ものには背景がある。砂利道で小さな石がゴロゴロあるのは許せる。しかし、そんなところに最初から砂利などなかったのだ。誰かが砂利を敷いたのじゃ。舗装する金がなかったのか、とりあえずな」

「はい」

「しかし」

「はい」

「敷いてしまったのなら、仕方がない。ある程度年月が経てば、動かしがたいものになる。最初からそこにあったようにな。まあ、砂利は動くので、いい喩えではないが。ビルもそうじゃ。住

宅地に建つ高層マンション。そのビル風。これも以前にはなかった。しかし、何年も、そんな風が吹いておると、認めるしかない。動かしがたいものとしてな」

「自然の景観も変わるでしょうから」

「そうじゃな。山の形も実際には変わっていくだろう。川の流れもな。だから、動かないものなどないのじゃ」

「じゃ、万物は全て動いているわけでしょ。変化しているわけでしょ」

「その中で」

「はい」

「変化の緩いものが好ましい」

「師匠が好きなのですね。そういうのが」

「まあな。あくまでも比較だ。そして、単純なものがよろしい。それ以上捻ったり、工夫をしたりせんでよろしい」

「それも師匠が好きだけなんでしょ」

「いちいち、好き好きというな」

「あ、はい」

「わしは、自分の好みを言っておるだけに聞こえるじゃないか」

「そうなんでしょ」

「まあ、そうじゃが」

「安心しました」

了